Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

関係論的な視点からみた子育て支援
―保育の日常性と関係性からの問い直し―

大豆生田　啓友（関東学院大学）

1　問題意識

子育て支援は、保育の日常的な営みの付加的な機能として位置づけられている傾向が少なからずある。それは、子育て支援イコール「地域子育て支援」（相談、園庭開放、一時保育等）、あるいは「時間延長保育」（預かり保育等）や「就労支援のための保育」の機能に限定して捉えられることがあることからも理解できる。

「子育て支援」とは、親が育つこと、子どもが育つこと、子育てを支える社会（支え合いの子育て）やよりよい子育て環境を作っていくための支援機能なのだとすれば、それは単なる付加的な機能ではなく、保育の日常性として、不可分な関係の中で捉え直していくべきではないかと考える。

そこで、本発表では、１つの事例をてがかりにしながら、保育の日常性から子育て支援について考察したい。特にここでは、関係論的な視点を用いることにより、「育ち合う共同体」としての保育の場における子育て支援機能の考察を行うことを目的とする。

2　事例について

この事例は、S 市の私立幼稚園において、気になるF 児とその親へのかかわりを行ったもので、担任保育者（年中４歳児から年長５歳児）の物語的記述を通して、考察を行った。

F 児は、入園当初から保育者に攻撃的になったり、集まりの場で大きな声をあげて走り回ったりするなどの姿が見られ、止めようとしてもまったく言うことを聞かず、逆にエスカレートする一方の姿があった。そのようなF 児の気になる姿の背後には、母親の乱雑なかかわりがあると考えられたため、母親へのかかわりを行い始めた。しかし、その後、他の母親達との関係がうまく持てないことを理由に突然の退園を申し込んできた。それでも、保育者は、母親との積極的なかかわりを行い、退園しない方向に関係をつなげていった。

当初は、保育者のF 児へのかかわり方についても拒否的な母親であったが、園全体で協力体制を持つ中で、繰り返しF 児のよい姿を伝え、コミュニケーションを持つことにより、次第に母親自身の本音が聞けるようになってきた。それは、F 児の母親自身が実母から厳しく育てられたのに、なぜその自分の母親が孫であるF 児には甘いのかが納得いかず、F 児に対してつらくあたってしまうといった内容であった。

その後、ゆっくりではあるが、年中児から年長児クラスになるプロセスの中で、親子共に変化をしていく。連絡ノートでのやりとりを行う中で、自分はだめな母親だといったことを書いてくることが多かったが、それを受け止めていく中で、次第にF 児のことについても受け入れられるようになっていった。また、他の母親も同じように悩んでいたりすることを伝えていくなどを行っていく中で、年長組ではクラス委員にまでになり、他の親とのかかわりも積極的に行うように変わっていった。また、F 児も気になる姿がなくなったわけではないが、自分らしく園生活に取り組めるようになっていった。

（当日の発表では、もう少し詳しく説明する。）

3　関係論的な視点

保育の場は、子どもを通して日常的に、しかも継続的にかかわっていく場であるからこそ、このような母親との関係をも含めて支援していくことの可能性が存在する。この事例では、母親を肯定的に受け止めてきたことが、母親自身が変わるきっかけを生み出し、それが子どもの姿の変化をもたらしたものだと捉えられる。これは、親を支援することが、子どもの育ちを支援することになるという「関係性」を提示する事例でもある。しかも、この事例では、保育者と母親、保育者と子ども、母親と他の親、母親とその実母、保育者と保育者、そして母親と子どもの関係のあり方を変えるものであった。

近年の発達研究において、人間の発達や行為を個人の特性や能力に帰属させて捉えてきた個体能力論的なパラダイムの転換を行い、行為や発達をその主体の取り巻く社会・文化的な関係構造から切り離すことなく、その多様な網の目に位置づけて読み取ろうとするアプローチとして「関係論的な視点」があげられる。

佐伯胖氏は関係論的な見方とは、「人間の行為や能力の形成・変容の過程を見る際に、私たちが知らず知らずのうちに陥っていた（暗黙の権力によりかかった）、

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

中心とされてきた特定の原因系にすべてを帰属させてしまう解釈構造を解体して、周辺にある具体的かつ末梢的な事実に注目し、そこから、これまでと異なる新しい意味世界を構築しようという、見方を呼びかける言葉である」と説明している。

先の事例の場合を考えてみたい。事例を読み解いていく中で浮かび上がるF児および母親の問題と思われる行為は、その本人そのものが有している個体能力的な問題性として捉えるよりは、これまでの彼らが育てられてきた周囲の関係性や歴史性といったその主体を取り巻く社会・文化的な複雑な関係構造の中で生じていることであることが理解できる。この事例でも、このような「関係構造」や「周辺」に着目することによって、これまで単に子どもの行動特性、あるいは親の問題と個人の能力といった概念に帰属させて説明されがちであった慣習的なディスコースの文脈を捉え直すということに大きな意味がある。

また、鯨岡峻氏は、人と人との関係性の中で子どもの発達を捉えようとする「関係発達論」を展開している。この視点では、育てられる者が育てる者になっていくという子育てを世代間のリサイクル過程と捉えていると共に、一人の生涯の発達過程はその養育者の生涯過程のある時相と重なり合い、その両過程が相互に影響を及ぼし互いに相手を規定し合うという形で同時進行する一側面であることを述べている。

事例の場合も、F児の母親自身が育てられた過程がF児へのかかわりを歪め、そのあり様を相互に規定していることになっていたと言える。このような子育てのリサイクル過程に対して保育者あるいは子育て支援者がどのように関与していくかはとても難しいが、事例のように、継続的で日常的な場において親子に同時にかかわっていく保育の場において、その関係性への支援を行っていける可能性があると言えよう。

4　正統的周辺参加論

関係論的な発達の視点を提供する理論のひとつに「正統的周辺参加論」がある。正統的周辺参加論(Legitimate Peripheral Participation:LPP)とは、Lave,J.&Wenger,Eが提唱した概念で、人間の学びを新参者が共同体の社会文化的実践の十全的参加者へと移行していくプロセスと捉えており、まさに学ぶことは共同体への参加を通してアイデンティティを形成する過程として見ることができるというものである。

正統的周辺参加論では、「参加」が一つの鍵概念となるが、ある意味ではこの事例もF児の母親が幼稚園という広い意味での共同体に「参加」していくプロセスであったと読み取ることができる。当初はある意味で共同体になじむことができない「新参者」的な位置にあったものの、F児へのかかわりをめぐっての様々なやりとりの中で保育者との関係性が生まれ、その保育者の存在を媒介としながら、最終的には「F児の姿を共に見ること」や、「クラス委員として参加する」など、その共同体における「参加」の位置を変え、成員性を獲得しているのである。

ここでは、この母親が共同体における成員性を獲得するための「媒介」として、保育者の存在が機能している。そして、その「媒介」があることによって、単なる外的要因としての変化のみでなく、その主体としての母親の模索による相互交渉のプロセスとして、揺らぎながらも「参加」の深まりがあったとのだと解釈できる。

この事例における「共同体への参加」とは、子どもと保育者あるいは子ども同士の関係のみならず、親と子ども、親と保育者、保護者同士、保育者同士など、多様な関係構造の中に位置付けられる。これまでの保育の日常性という概念は、ともすれば、「子どもと保育者」「子ども同士」という狭い関係性の中に閉じて捉えられることが多かったが、実際にはその背後にある親や家庭との関係性は非常に深く関係しているものである。それがこれまで浮上してこなかった背景には、園という共同体と家庭や地域という共同体を分断して捉えてきた文化的・社会的背景があり、それが保育と子育て支援（家庭・地域との連携）を分断して捉えてきた一側面として存在していたのではないかと考える。

最近では、親や地域の人たちが人的「資源」として保育の場に「参加」する取り組みが増えているほか、地域の親子の居場所としての「居場所」としての機能も求められるようになっている。これまでも大切にされてきた「子どもと保育者」や「子ども同士」の関係性を再認識しつつ、親や地域の人、保育者同士などの多様な関係構造の中で、「育ち合う共同体」としての視点から、保育実践を再構築する必要がある。そうすることで、「保育」と「子育て支援」は分断された関係ではなく、不可分の関係として再構築されるのである。

<参考・引用文献>

佐伯胖「保育研究の在り方」『保育の実践と研究』pp.28 スペース新社保育研究室　Vol1　No2　1996年

鯨岡峻『<育てられる者>から<育てる者>へ－関係発達の視点から－』日本放送出版協会、2002年

NII-Electronic Library Service